平和の大切さ

～戦争体験を聞く ～

「平和の大切さ」ということで戦争体験をされた方にお話を伺いました。紙面の都合上、お話の全てをご紹介することはできませんが、多くの貴重な話を聞き、改めて命の尊さ、平和の大切さ、ありがたさを実感しました。

（担当／新井博海、三塚好江、新井紀子、加藤和代　新井優）

石井正男さん

・昭和４年生まれ（88歳）
・終戦を迎えた場所
富士見市上南畑

私の父は、大正８年頃兵役で北海道の旭川へ２～３年行っていたことがあると聞いています。南畑から他にも一緒に行った人がいるそうです。

私は、川越の農蚕学校に通っていました。自転車に乗って行きたかったけれど、知り合いが自転車を盗まれた話を聞いたりしているうちに、鉄鋼の供出が始まり、欲しくても自転車がなくて手に入らなくなってしまいました。そこで、学校へは鶴瀬の駅まで歩いて行き、電車で通ってました。

南畑橋の欄干も鉄の供出で無くなっていたのを覚えています。橋は木造だったから、橋だけは残っていました。

南畑に爆弾が落ちたことも覚えています。下田あたりの家の牛小屋がひっくり返っているのを学校へ行く途中に見てびっくりしました。

そうそう、家の前に防空壕を掘りましたが、雨が降ると水がたまったりして大変でした。

忘れられないのは３月10日の東京大空襲です。

家の庭から東京が真っ赤に燃えているのが見え、空襲の音までもが南畑の家まで聞こえてきました。本当に怖かったです。今でも忘れることができません。後から、小学校４年生の時に教えてくださっていた先生が、東京大空襲で亡くなったことを聞き、とてもショックでした。

玉音放送を聞いて戦争が終わったんだなと思いました。

戦後は、どこも食糧難で買い出しの人が来ていました。親戚が来たときは食べ物を持たせて帰らせていました。梨は昭和35年位から始めました。最初は長十郎。幸水を始めた時はカラスにつつかれて困りましたよ。

栗原チヨさん

・昭和４年生まれ（88歳）
・終戦を迎えた場所
富士見市下南畑

私は、南畑で生まれ育ちました。

子供の頃は、勤労奉仕で草むしりや田んぼや畑の手伝いで南畑のあちこちに行きました。

当時は、荒川の河川敷も畑になっていました。どこかはわかりませんが、お墓までも畑にしたという話も聞いたことがあります

それだけ食べる物を作るのに必死だったんだと思います。

川で、タニシやどじょうをとって食べたりしていましたし、麦めし、じゃがいも、さつまいもを食べていました。

空襲になると防空頭巾をかぶり、急いで家の庭に掘った防空壕に逃げ込んでいました。

今は、夜も灯があり明るいけれど、当時は夜は真っ暗でしたから、夜に下田の方で焼夷弾が落ちた時は真昼のように明るくなり、怖かったです。わが家には親戚から預かっていた箪笥があり、母が、家に落ちたらどうしようととても心配していたことを覚えています。

そういえば、水子の方だったか、はっきりとは覚えていませんが、お墓に焼夷弾が落とされたという話も聞いたこともあります。

父は、戦争にはいかなかったと聞いています。

戦争中は産めよ増やせよの時代でしたからね。私の母が当時、妊娠した時は、父は母に栄養のあるものを食べさせていました。父には戦争にいけなかったことへの何か思いがあったのか、今となってはわかりませんが、男の子が産まれたら、自分のかわりにというような期待があったのかも知れません。

生まれてきたのは女の子で、おかげで、妹は体が丈夫です。

終戦の時、父は、とてもくやしがっていました。よほど、ショックだったのか真夏だというのに家の雨戸を閉め、布団をかぶって寝てしまったくらいです。私も戦争に負けた時は、とても、がっかりしてしまいました。

戦争に負けたことで、占領下になると聞き、おっかないと思っていました。女は危ないから、お化粧なんかしていないで泥でもつけておいた方がいいと言っていた人もいたくらいです。

戦争だけは、いやだと思います。

吉野三代作さん

・昭和５年生まれ（87歳）
・終戦を迎えた場所
富士見市東大久保

学校に行っている時は、先生が戦争に行く希望者や、上福岡の火工廠へ働きに行く人を募ったりしていました。でも、自分の周りには、農家の長男だったりして、家の仕事が忙しかったから希望者はいなかったようでした。学校を卒業すると男は消防に入れられました。消防と言っても今とは違い、自警消防団のようなものです。南畑に火の見櫓が大久保と上南畑と木染の方に３つ位あって、そこから、見張りをしていました。それから、鶴瀬の駅前に青年学校があり、学校を卒業した人たちが集まって勉強していました。南畑からも15人位は来ていたと思います。戦争から帰ってきた人が先生をしていました。

忘れもしないのは、３月10日の東京大空襲。南畑から東京が明るく見えてこわかったです。

それから、４月24日の富（とめ）のお地蔵様の日に空襲があり、所沢の高射砲がうまく当たって飛行機が新河岸に落ちました。３人位パラシュートで降りてきて、福岡の火工廠の兵が捕虜にして連れていきました。

おれは、長男だから戦争にはいかなかったけれど、農家は農家で大変でした。農作物を作っても作っても供出でみんな、持っていかれちゃう。そうそう、うちの蔵は白塗りの蔵だけど、白いと目立ってＢ29の標的にされちゃうんじゃないかって近所の人に心配されたりして、戦争中は黒く塗っていたことがありました。

戦後、東京の方の人が衣類を持って買い出しに来ていました。あの家は女がいるから衣類と食べるものを交換してもらえるとか、いろいろと考えていたみたいです。農家の供出もずっと続いていて昭和35年位までは、供出があったと思います。冬になると農家は仕事が少なくなるから、戦争が終わって５年位は冬になると東京の焼け跡の片づけに行っていた人もいました。

取材を終えて

今回は、戦争時代を南畑で過ごしたという方々からお話を伺いました。直接戦地には行っていないけれど、「この年になってもう一度戦争は嫌だよ。」の言葉が心に残りました。

戦後育ちの私たちですが、社会の不穏な状況をしっかり見つめ真の平和についてきちんと考えていかなければ…と痛感しました。